

# 専門教育科目「生活」における気付きの積み重ね

## —学内探検活動の目線を中心にして—

勝 田 み な

### <摘 要>

本研究では、専門教育科目「生活」（以下、「生活」）の中の「学内探検」の授業を取り上げた。学生が主体的に学内を見て、聞いて、触れ、探すという体験活動を行うことにより、気付きの積み重ねにつながるようになった。そして、学生生活を少しでも豊かに感じられるような生活環境を客観的に捉えなおすことを目的にした。「学内探検」後のアンケートにおいて、「生活」で当初から重視されてきた「気付き」によって、人とのかかわりをより深める学内探検活動は効果的であった。また気付きをふり返ることにより、子ども目線と保育者目線の両方の目線を意識し、より客観的に物事を見ることが、将来保育者として働く場合には必要な能力であり、身に付けていくきっかけにもなった。今後の課題として、学んだことは学生生活が豊かなものになっていくと各自が思えるような気付きをさらに充実させることが挙げられる。

キーワード：学内探検 気付き 目線

### 1. 問題と目的

本研究で「学内探検」を取り上げた理由は、身近な人々や社会にふれることによって、自分が社会の中の一員であることと、周囲の人々への感謝の気持ちなどに「気付く」ことができるからである。勝田（2017）は、「人とのかかわりを深める専門教育科目『生活』の授業のあり方—『学内探検』の実践において無自覚なものから自覚された気付きへの模索—」の内容を検証するためにアンケートを実施した。

中野（2017）は、「生活科はやはり自分とのかかわりで見えていくということ」と述べており、

自分と身近な人々や社会及び自然とのかかわりに関心を持つ点は大きく変わらないが、具体的な体験から自分はどうにかかわっていくのか、理解していることをどう使うのか、何ができるのかに照らし合わせて、学生生活にかかわるように生かしていくことが大切になる。加納(2017)は、「自分の生活に取り入れたり、生かしたりすることで、学びはより高次に深まっていく」とさらに一歩踏み込んだ主張をし、気付くだけでは足りないことを述べており、管見の限りでは「気付きの質を高める」などの表現で研究されている。高橋・谷田(2016)は、「個での気付きには限界があったとしても、仲間と関わりあって活動すること、思考することで、気付きを深めることができ、それがまた個の力となって循環することがわかった」と気付きを深めるプロセスについて述べており、授業の中で具体的な体験を通して仲間とかかわるところから始め、仲間の考えを聞いてそこから自分がどう思うのかと思考を深めていくことを繰り返すことが重要である。桑原(2016)は、「子どもの発言に対して、先生のきり返し方を工夫していくことの必要性など学生が教師の立場にたって振り返ること」と述べており、将来、教職をめざす学生が、小学校1・2年生の生活科を教える立場になって、子どもの考えを引き出すことができるように問いかけを考えさせたり、教師の立場に立って考えさせたりすることは、日常のコミュニケーションを意識していくきっかけにもなる。それは、学生生活を豊かにしようとする態度の育成につながることである。伊勢(2016)は、「双方向性の直接的な働きかけが生じる活動や体験を基盤に置き、その活動や体験によって生じる『気付き』に注目しながら、その活動や体験を繰り返して児童が行うことを通して質を高めていく」と述べており、まだはっきりとは断言できない思いでも、具体的な体験の中で小さな気付きを繰り返すことによって気付きが深まってくるもので、積み重ねを体験することが、生活上必要な習慣や技能に結びついていくのである。

以上の先行研究をふまえて本研究では、学生が主体的に学内を見て、聞いて、触れ、探すという学内探検活動を行うことによる気付きの積み重ねから、学生の生活環境を客観的に捉えなおすことを目的にした。

## 2. 研究の方法

### (1) N短期大学の「学内探検」について

「生活」の授業形態は講義中心であるが、教科の特徴から、体験を重視させるためグループで活動させる演習を多く取り入れている。座席は毎回変更し、多くの人ともかかわっていけることをめざしている。N短期大学の「学内探検」は、体験活動を中心にした「生活」の授業の代表的な内容として位置づけられる。学内探検の目標として3点挙げる。①学内探検を楽しみ、関心を持って見る、聞く、触れる、探すなど、直接働きかけて自分とのかかわりを深め、自分にとっての居場所を見つける。②グループのメンバーとのかかわりを積極的にに行い、気持ちよく生活するためのきまりやマナーに気付く。③子どもの立場で活動に取り組む側と保育者の立場で活動に取

り組む側と両方の視点を持つ。学内探検の進め方は勝田（2017）の中で報告しているが、岩崎・伏見（2013）と久保田・池上（2014）の実践を参考にした。保育者及び教育者として将来仕事に就く学生がほとんどのため、アンケート項目の「子ども目線（子どもの立場で活動に取り組めたかどうか）」と「保育者目線（保育者及び教育者の立場で活動に取り組めたかどうか）」が、アンケート1回目と2回目の学内探検ではどのように変化したのか、「自由記述」で検討した。そして、気付くことを感得することによって、学校生活や社会へ生かそうとする気持ちを持ち、生活環境を客観的に捉えなおすような授業展開を行った。

## (2) 研究対象と時期

対象者は、平成28年度N短期大学子ども学科1年生全員と2・3年生数名を合わせた32名（男子6名、女子26名）である。クラスは2クラスに分けた。分け方は他の授業との兼ね合いで、Aクラスは16名（男子4名、女子12名）、Bクラスは16名（男子2名、女子14名）である。

授業時期は、平成28年度11月に2回で、「学内探検」の時間は1回約80分間である。

## (3) 手続き

「学内探検」の2回の各授業の最後には、ミニレポートを全員が書いた。1回目と2回目ともにミニレポートの項目の中で「アンケート」を実施し、質問項目は「学内探検」の目標をもとに、①学内探検は楽しいかどうか、②メンバーとは仲良くできたかどうか、③マナーは守れたかどうか、④「学内探検」を積極的に行ったかどうか、⑤子どもの立場で活動に取り組めたかどうか（アンケートでは「子ども目線」と表記）、⑥保育者及び教育者の立場で活動に取り組めたかどうか（アンケートでは「保育者目線」と表記）、⑦発見はあったかどうか、であり5段階で回答した。また自由記述では、目標に照らし合わせて小さな気づきから学生生活が少しでも豊かに感じられる言葉をピックアップして思考の変容と思われる表現を挙げた。

倫理的配慮として、口頭と文書にて研究の趣旨説明を行った。アンケート結果は、研究活動（論文、学会発表）以外には公表しないこと、プライバシーが厳守されることや本研究以外に使用しないこと、研究の協力や記入に関しては自由であり、成績評価に関係なく個人の不利益になるようなことはしないなどを説明した。なお、2回ともアンケートに回答した学生は32名中22名で回答率68.9%であった。

## 3. 研究の結果

加納（2009）は、「自分の本質に気付くことは、学校教育のみならず社会全体の課題でもある。夢や希望、自信を持てなくなった若者、ニートやフリーターなどの増加の問題に少しでも歯止め

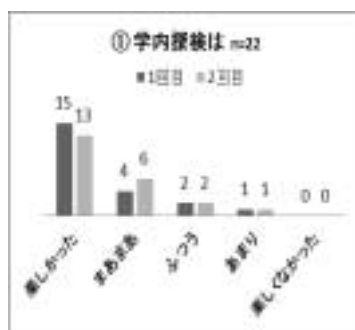
をかけるため、生活科の果たす役割は大きい」と述べており、「生活」では「気付き」を重視している点からも自分自身への気付きをも感じられるようになり、客観的に広がりを持って見ることによって気付きを深め、生活環境を捉えなおすための思考・感情に働きかけることをめざした。

(1) 「学内探検」アンケートからわかること

2 回アンケートを実施したのは、2 回の比較から学生の思考がどのように変化したのか、していないのかを調べるためである。また 2 回のメンバー構成は違うため、メンバー間のかかわり方によっては明らかにならない場合も出てくるかもしれないが、各自がこのメンバーでどのように学内探検を行い、どう感じたのかを率直に答えてくれることが重要であると考えた。「学内探検」の目標に照らし合わせて、a) 学内探検でかかわりが深まったか①、b) メンバーと協力してマナーを守って積極的だったのか②③④、c) 子ども目線、保育者目線の両方の視点を持ち、発見はあったのか⑤⑥⑦についてまとめた。

どの項目も 1 回目 2 回目の値を  $t$  検定により検証したが、いずれも統計的に有意な結果はみられなかった ( $p > 0.10$ )。しかし、平均と標準偏差の値が 2 回目にながっている項目がほとんどであった。たとえば、メンバーを替えて学内探検をしたとしても、2 回目は何を行うのがわかっているため、2 回目の学内探検はより具体的に、生活環境を細部にわたって見てくるなどの工夫が必要であった。

a) 学内探検ではかかわりは深まったか① (図 1)



学内探検の目標でもある「①学内探検を楽しみ、関心を持って見る、聞く、触れる、探すなど」では、「楽しかった」「まあまあ」を合わせると約 87%が楽しめたと感じている。しかし、2 回目になるとポイントが下がっている。これは、メンバーを替えたために生じるメンバー間のぎこちなさなのか、自ら楽しもうと思えなかったのか、マンネリ化を感じたのか、明確な理由は不明であるが、楽しいと思えるような環境設定を考慮する必要があった。

図 1 学内探検でかかわりは深まったか

b)メンバーと協力してマナーを守って積極的だったのか②③④ (図 2)

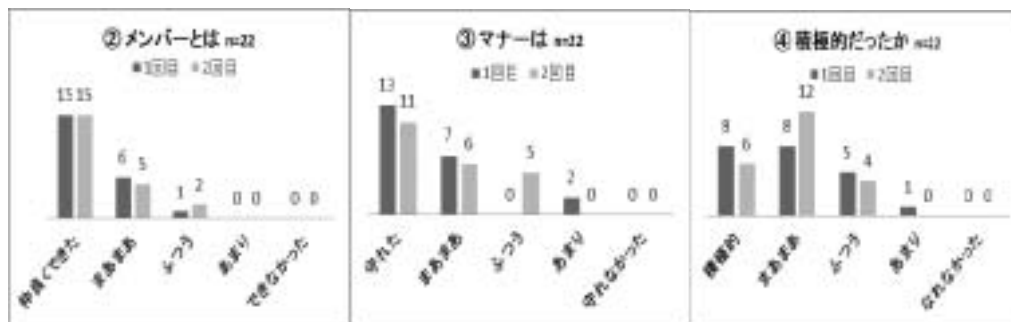


図 2 メンバーと協力してマナーを守り積極的だったか

図 2 より、メンバーとはおおむね仲よくできたようだ。マナーについては、自己判断が難しいが、守ろうという気持ちは持っている。言動や立ち居振る舞いは授業の中でも指導を欠かせない。積極的だったかについては、「まあまあ」「ふつう」が約 60%以上もあり、自分から率先して行うことに恥ずかしさや自信のなさが表れているのだろう。

c)子ども目線、保育者目線の両方の視点を持ち、新発見はあったのか⑤⑥⑦ (図 3)

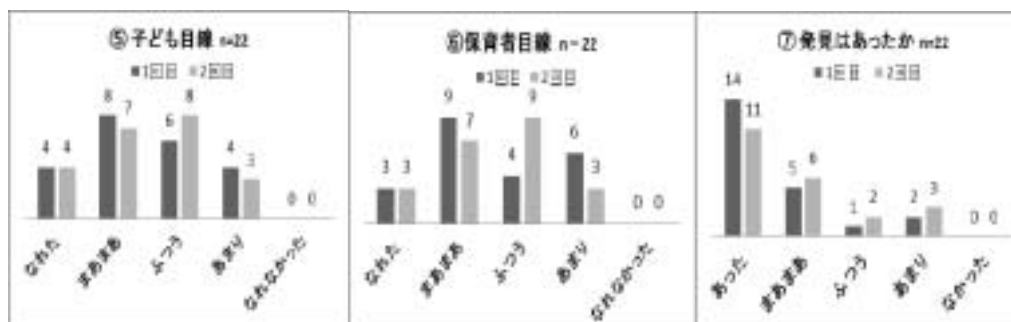


図 3 子ども目線、保育者目線、新発見はあったか

「子ども目線」は、「守れた」と答えた割合が低く 2 回とも 18%だった。これは、そうそう子どもになりきれないという気持ちが働いたことにもよるだろう。また、「ふつう」と答えた割合が 27%~36%で最も高かった。「保育者目線」においても「守れた」と答えた割合は低く 2 回とも 14%だった。2 回目の「ふつう」と答えた割合は 41%にもなり、保育者としての立場を理解しようとするまでには至っていなかったようだ。発見があったかどうかは、2 回目になれば 1 回目ほど見つけにくくなるのは当然であるが、2 回目が始まる前にどんな小さなことでも五感を働かせて気を付けて見るように話した。

## (2) 自由記述

学内探検を全体的にどう感じているのか、自由に記述した（表1）。

表1 自由記述：働いている人、備品・設備、雰囲気、教室・部屋 注：（ ）人数

| 1回目  | 2回目   |
|--|---|
| <b>1. 働いている人(14)</b><br>清掃員(7)先生(4)図書館(2)普段会わない人(1)                                  | <b>1. 働いている人(7)</b><br>働いている人(2)清掃員(1)先生(1)図書館(1)職員(1)学食の人(1)                   |
| <b>2. 備品・設備(19)</b><br>トイレ(9)図書館(4)エレベーター(2)文化センター(1)屋上(1)<br>スペース(1)機材(1)           | <b>2. 備品・設備(10)</b><br>トイレ(2) 図書館(2)文化センター(2)屋上(1)<br>研究室の水道(2)学生ホールの時計(1)      |
| <b>3. 雰囲気(13)</b><br>静か(4)トイレがきれい(3)和やかで明るい(2)きれい(1)<br>照明が明るい(1)病院みたい(1)建物によって違う(1) | <b>3. 雰囲気(3)</b><br>静か(1)教室によって雰囲気が違う(1)雨のせいがかさばしい(1)                           |
| <b>4. 教室・部屋(5)</b><br>たくさん部屋があった(4)建物によって教室よりも研究室が多い(1)                              | <b>4. 教室・部屋(3)</b><br>文化センターのホールは映画館みたい(1)図書館から文化センターへつながっていた(1)<br>セミナー室がある(1) |

1回目は、初めての体験なので、働く人、備品・設備、雰囲気、教室・部屋など普段行けそうにもない場所に行けたことで、発見などが多く書いてあった。なるべく、どんな小さなことでも、他の人が見つけたからとあきらめるのではなく、さらに、きめ細かに見るように話した。

また、2回目のアンケートでは新たに、「あなた方が幼稚園の先生、保育士だとしたら、どんなことを園児に指導しますか？」という一文も付け加えて自由に記述した（表2）。

アンケートで言えば、「保育者目線」で探検をした結果、何がどうわかったのか、何がしたいのか、これはどう使えるのかを考えさせるためでもあった。

「5.気付き」に注目すると、1回目は初めての探検のため、新鮮な心の動きといわゆる「子ども目線」での記述があった。中には、教職員の話を直接聞いて今後の学生生活に活かしたいと思ったり、清掃員への感謝の気持ちを持った内容も記述したりした。2回目は、1回目よりも分量が多い記述があり、「保育者になったとしたら」という「保育者目線」に立っての気付きに思考を変化させることによって細かいところにまで気を配って、見て、行動する必要性を記述していた。

表2 自由記述：気付きと保育者になったとしたら

| 1回目  | 2回目   |
|--|---|
| <p><b>5. 気付き</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ひんばんに使っていきたい</li> <li>・3号館は今まで見たことのない感じ</li> <li>・知っている気になっていたが、知らない部屋や場所に気付いた</li> <li>・こんなところにも部屋があったのだと初めて知った</li> <li>・学内探検がなかったら大学内には何があるかとか知らない</li> <li>・まだまだし自ら探検しようとは思わないので良い機会だった</li> <li>・来週学内探検も楽しみで、今回行ってないところを回りたい</li> <li>・図書館を探検して学生リクエストができることを知って、リクエストしてきたのが嬉しかった</li> <li>・探検をしてあまり学校で会えない人にも会えたので楽しかった</li> <li>・いつもトイレや洗面所がきれいでどんなふうに掃除をしているのかと思っていたが掃除をしている人にはすごく感謝している</li> </ul> | <p><b>5. 気付き</b></p> <p>&lt;保育者になったとしたら&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・園児に勉強している時間にはしゃべらないでねと言う</li> <li>・探検中は迷子にならないように注意する</li> <li>・ドアや壁をたたかないようにする</li> <li>・走らない、大きな声を出さない、一人で行動しない</li> <li>・教室に勝手に入らない</li> <li>・子どもたちはほかに目がいきそうなので、集団で行動できるように心がける</li> <li>・階段では転落しないように手すりにつかまる。廊下では離れないように手をつなぐ</li> <li>・「探検」というだけで子どもたちはワクワクするだろうから、勝手な行動をとらないように「OOちゃんいる？」などと声を出して呼びかける</li> <li>・静かにしないといけないところでは静かに行動する</li> <li>・マナーを教える</li> <li>・大勢が歩くのでゆっくりと歩く</li> <li>・すれ違った人にあいさつをする</li> <li>・きょうは雨だったので床がすべりやすくなっていたからすべらないように注意を促す</li> <li>・危険なところはどこかを確認をしたりする</li> <li>・時間を考えて静かにしなくてはいけないところとうるさくても大丈夫なところのメリハリをつける</li> <li>・集団でまとまって行動することが大切</li> <li>・図書館の中に非常口があるんだと初めて知った。その非常口は使われずに職員がいる場所の扉をあけるといっていたのに驚いた</li> <li>・非常口をちゃんと見ていないんだと思った</li> <li>・行ったことのないところなど新たにここにこんなものがあったんだとかいろいろと気付くことができた</li> <li>・多くの学生とすれ違ったのでこの時間帯は授業が多いんだと思った</li> <li>・車いすの人が開けやすいようなドアになっていた</li> <li>・非常口は少ないと思った</li> <li>・学内探検をしてなんとなく学校の構造とかもわかった</li> <li>・小さな段差などが多い</li> <li>・子どもたちにもこのような機会を作って、お互いに知らなかったところを教え合うのも良いと思う</li> </ul> |

#### 4. 考察

本研究では、学生が主体的に学内を見て、聞いて、触れ、探すという学内探検活動を行うことによる気付きの積み重ねから、学生の実生活環境を客観的に捉えなおすことを目的にした。特に「子ども目線」と「保育者目線」、自由記述から学生の思考の変化を検証した。

##### (1) 「子ども目線」と「保育者目線」の両方の目線から

「子ども目線」では、「生活」を楽しみと思い、興味を持って取り組み、活動を進めていく中で感情に照らし合わせて思考を深めていけるように取り組んでいけることである。文字通り自分が



子どもになったとしたらという視点で行い、好奇心、やる気、無邪気などを自由に表現した。

「保育者目線」では、保育者としてどのような支援や指導や配慮が必要かという視点で、子どもたちに意欲が湧くような具体的な体験を設定し、子どもたちの気付きに目を向けることができるようにすることである。学生が、「自分の思いや願いを実現する過程において、身近な人々、社会及び自然を自分とのかかわりでとらえ、自分自身や自分の生活について考えたり表現したりすることができるようにすること」(文部科学省 2017) をめざしていった。

両方の目線を持って感じたことは、体験をとおしてどのように変化し、体験で見つけた気付きをどのように他者へ伝えていくかなど、両方の目線は、学生に身に付けてほしい力になった。

## (2) 自由記述から

「1.働いている人」、「2.備品・設備」、「3.雰囲気」、「4.教室・部屋」、「5.気付き」の5つに分けて自由記述を挙げてみたが、1 回目はメンバーにもそれなりに気遣いながらも興味のあるところを探していた。数を数える体験を通して近くにあるもの、気になった点などを見つけることにつながった。この体験は、日常的に接していて、ある程度知っている範囲内の備品・設備についてだが、授業がない限り卒業まで知らなくても過ぎていくものだったのであろう。あまりの数の多さに戸惑うグループもあった。

2 回目は、メンバーが違っているものの、学内探検について理解しているので、スムーズに探検へ出発したところとメンバー構成で日頃かかわりの少ない者同士などのかかわればいいのかと、頭を悩ませるグループもあった。ここでも 1 回目とは違う思考が働き、お互いがどのように行動しお互いで何ができるのかを模索した。この体験は授業の進め方の中でコミュニケーションをお互いにどのように取っていくのが最良なのか、思考をめぐらせ、気付きを得ることになった。「学内探検」は、コミュニケーション力を高める時間にもなり、学校生活を送る上で必要な時間であった。また、授業をきっかけに今後の学校生活で生かしていけるように自分自身のテーマにつながった記述もあった。これは、「学内探検」の目標を果たすだけでなく、「生活」の小学校新学習指導要領目標 (3) にある「生活を豊かにしたりしようとする態度を養う」に達しており、この目標に沿った具体的な体験を意図的・計画的に進めていることが改めて明確になった。

「5.気付き」については、2 回目の記述が特に多かった。これは、「保育者になったとしたら」という「保育者目線」を入れたことで、注意を促され思考が刺激され考えるきっかけとなったようだ。経験の少ない学生には漠然と指示を出すのではなく、より具体的にそして新しいことでも取り組んでみようという気持ちになってもらうために必要である。それが、2 回目の記述が増えた理由になったと考えられる。しかし、アンケート結果では、図 3⑥より、「保育者目線」において「なれた」と答えた割合は 2 回とも 14% で低かったのは、これが「保育者目線」だという自信を持って答えることができなかつたと考えられる。

以上により、「子ども目線」と「保育者目線」の両方の目線を持つことの必要性は、気付きの積



み重ねによって、生活環境を客観的に捉えなおすことにつながったことなどが明らかとなった。自分では気付いていない無自覚なものは誰もが持っているものではあるが、授業をきっかけとして明確になりつつあることになっていくであろう。

## 5. まとめ

「学内探検」は、毎年人気のある授業である。学生自身が子ども時代に戻ったかのような感覚もあり、教室を出て自由に学内を回り誰かに出会ったり、興味のあることを見つけたりすることができる点などがその理由である。「子ども目線」や「保育者目線」で体験することにより、どのような小さなことにも五感を働かせることは、保育者には必要な感性である。それは、「清掃員の人に授業の後、感謝の気持ちを伝えに行った」や「学校内をきれいに使う」、「挨拶は自分から行う」などの学生の言葉からも理解できるし、実行している姿を見ることもあり、気付いたからこそ、自らの学生生活にも生かしたいという生活環境を捉えなおすに至ったと言える。これは、キャリア教育における基礎的・汎用的能力においても、自分と社会との関係を考え主体的にキャリアを形成していくことができる力を身に付けていくことに関連深いものである。

今後の課題として、学んだことは学生生活が豊かなものになっていくと各自が思えるような気付きをさらに充実させることが挙げられる。

### 【引用・参考文献】

- 愛知教育大学教職キャリアセンター教科教育学研究部門加納誠司（2017）『『SCOPEⅢNo.7』新学習指導要領の生活科を読み解く』教職キャリアセンター p.8
- 愛知教育大学教職キャリアセンター教科教育学研究部門中野真志（2017）『『SCOPEⅢNo.7』座談会テーマ新学習指導要領の動向』教職キャリアセンター pp.17-24
- 伊勢正明（2016）「生活科の指導内容・方法が示す保幼小連携のモデル」帯広大谷短期大学紀要 第53号 pp.67-76
- 岩崎哲郎・伏見陽児（2003）「大学における授業の改善をめざして - 教職科目『生活科教材研究』の実践 -」東北大学出版会 pp.39-67
- 勝田みな（2017）「人とのかかわりを深める専門教育科目『生活』の授業のあり方 —『学内探検』の実践において無自覚なものから自覚された気付きへの模索—」名古屋経営短期大学紀要 第58号 pp.21-40
- 加納誠司（2009）「生活科学習における『気付きの質を高める』ことに関する研究」中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要第10号 pp.159-167
- 加納誠司（2017）「アクティブ・ラーニングを実現させる『深い学び』に導く生活科授業の創造 —次期学習指導要領改訂を視野に入れて—」愛知教育大学研究報告教育科学編 第66巻 pp.19-27
- 久保田尚・池上敏（2014）「教師教育における生活科の教科内容の研究 —山口大学教育学部初等科生活の実践を中心に—」山口大学教育学部附属教育総合センター研究紀要 第37号 pp.13-18
- 桑原広治（2016）『『生活科教育法』を受講する学生の生活体験とコミュニケーションに関する一考察』佐女短研究紀要 第50集 pp.83-95

勝田 みな

- 高橋千枝・谷田順子（2016）「生活科における気付きを深めるプロセスと指導について—集団活動と教師の働きかけが児童の思考に与える影響—」地域学論集第13巻 第2 pp.79-85
- 甫仮直樹（2013）「対象に愛着をもち、自分自身への気付きを自覚する生活科の学び—体験活動と表現活動を相互に繰り返すことの有効性に関する一考察—」教育実践研究 第23集 pp.151-156
- 味形修（2013）「生活科における自立についての一考察」明星大学明星教育センター研究紀要（3） pp.133-143
- 文部科学省（2016）「学習粗動要領改訂の方向性（案）」教育課程部会 pp.1-10
- 文部科学省（2017）『新学習指導要領解説生活編』 p.14
- 山本銀平・加納誠司（2016）『『地域への愛着』形成過程に関する一考察—『町探険』の実践分析を通して—』愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 Vol.1 pp.17-25

（名古屋経営短期大学子ども学科講師）